

ミステリ読書案内

2023. 3. 16 発行元

第457号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

はやみねかおるの代表作

ジュニアもの、YAミステリを中心に活躍している「はやみねかおる」の代表作についてである。『都会のトム&ソーヤ』シリーズは以前取り上げたので、今回は初期の頃のシリーズを振り返ってみることにする。

スタートは講談社青い鳥文庫

はやみねかおるが作品を出し始めた時期、私は読書中断期間に入っていた。したがって、読み始めたのは2000年以降のことになる。最初に読んだのがノベルスの『虹北恭助の冒険』。そこで、青い鳥文庫のことを知り、『夢水清志郎』シリーズに移ったわけである。

学校で子どもたちに読んでもらうためにミステリ本を集め始めた時期でもあり、シリーズを次々と読んだ。「子ども向けなのに、それなりに本格ものの要素が入っているなあ」と感じた。トリックは有名作

品からの連想が多いが、それなりに楽しめた。「小学生向け」に限定せず、大人にも読んでほしいと思うようになった。

今回の「代表作」は、初期の頃の3つのシリーズの第一作を取り上げることにした。『そして五人がいなくなる』、『怪盗クイーンはサーカスがお好き』、『虹北恭助の冒険』。今でも手に入りやすい本が多いし、図書館の児童書コーナーには必ず並んでいる。ユーモアたっぷり、肩の凝らない内容。短時間で読み終えることができるのも有難い。中学生、高校生、若者も、大人も誰が読んでも楽しめる作品。

NO.3「虹北恭助の冒険」

2000年講談社ノベルス。このシリーズは青い鳥文庫ではないことがポイント。幅広い読者を期待したものだと思う。正式の題は『少年名探偵虹北恭助の冒険』になっている。『メフィスト』に連載したものに書下ろしを一編加えている。

第一話の『虹北みすてり商店街』の時点では名探偵・虹北恭助もワトソン役の野村響子も小学五年生でスタートしている。舞台は虹北商店街の駄菓子屋「こちょう屋」。店のおクマおばあさんが響子に最近、本来は置いていないはずのお菓子の袋が置かれるようになったと相談を…。謎を抱えた響子が向かうのは学校に行っていない恭助のところ。ほとんどの時間を古本屋「虹北堂」で過ごしている彼の推理は？

NO.1「そして五人がいなくなる」

1994年講談社青い鳥文庫。『名探偵夢水清志郎事件ノート』シリーズの一冊目。最初は名探偵の登場場面。「わたし」の家のとなりの洋館に引っ越してきた。運び込まれるのは段ボール箱ばかり。ベットとかテーブルとかはないのか？ 次の日に訪ねてみると、背の高いやせた男が出てきた。黒のサングラスで黒い背広。家の中は本だらけ。元は大学で論理学の教授をしていたという。でも今は名探偵。更に次の日に訪ねてみるとおなかを空かせたまごごろ。食べ物を恵んでもらって…。食い意地が張っているらしい。…こうして、岩崎亜衣…との出会いが進んでいく。

名探偵が最初に解決しなければならない問題は子どもたちの消失事件。教授(清志郎)はオムラ・アミューズメント・パークに皆を連れていくことになる。教授本人が一番アトラクションを楽しんでいる様子なのだが…。そのうちにピエロから『大マジックショー』のピラをもらう。「伯爵」が演じる「宙ぶりの箱から人間が消える」というものだそうだ。伯爵が投げた赤いバラを受け取った小学校四年生くらいの女の子が舞台上に呼ばれ、箱の中に…。箱が閉じられ、1、2、3で消えてしまう。そして、五人がいなくなる事態に…。

No.2「怪盗クイーンはサーカスがお好き」

2002年講談社青い鳥文庫。『怪盗クイーン』シリーズの一冊目。怪盗のクイーンと助手のジョーカー、そして飛行船と人工知能RDは基本の設定なので、本書から登場する。その後のシリーズの中で様々なレギュラーメンバーが増えていくのだが、本書はヒーロー対敵役の比較的単純な構成。セブン・リング・サーカス団が出てくる。

『夢水清志郎』シリーズは謎解きをメインに据えた作品だが、『怪盗クイーン』は冒険ものの作り。飛行船トルバドゥールの中での漫才的やり取りから始まる。クイーンは猫のノミ取りに夢中になっている。ジョーカーはクイーンに仕事をするように頼むのだが…。RDは猫の抜け毛で空調設備が不安定になることを心配しているのだが…。ようやく腰を上げたクイーンが狙うのは星菱大造が所有している赤いダイヤモンド『リンデンの薔薇』。予告状を出して警備網をくぐって潜入する。でも別の一味に先を越されてしまう。失敗したクイーンは、特殊能力を持った集団はサーカス団の中にと考えて、奪還に向けて次の策を練る。魔術師、催眠術師、水晶占い師などと対決していくクイーンとジョーカー。華々しい攻防が展開され…。